

日本映画放送株式会社 第59番組審議会議事録

1. 開催年月日 : 平成29年9月19日(火) 15時～16時
2. 開催場所 : 東京都千代田区有楽町1-1-3 東京宝塚ビル15階  
日本映画放送株式会社 ボーディングルーム
3. 委員の出席: 委員総数 9名 / 出席委員数 8名  
出席委員(順不同、敬称略): 菊地 実・鈴木 嘉一・川本 三郎・坂井 保之・  
砂川 浩慶・曾根 和子・鳥居 美砂・西 正  
欠席委員(敬称略) : 田保橋 淳

放送事業者側出席者: 代表取締役社長	杉田 成道
常務取締役	佐藤 信彦
執行役員編成制作局長	宮川 朋之
編成制作部副部長	樋渡 典英
編成制作部	三宅 歩
番審担当	堤 靖芳
	清水 明(記)

4. 議題 (1) 審議事項 時代劇専門チャンネル “藤沢周平新ドラマシリーズ 第二弾”  
『小さな橋で』について  
(2) 報告事項 日本映画専門チャンネル 9月から6ヶ月間の企画編成  
「いまも、映画作家たちは。」について

5. 議題 (1) 概要

2015年、時代劇専門チャンネルは、時代小説家・藤沢周平作品を映像化する一大プロジェクト“藤沢周平新ドラマシリーズ”の製作を開始した。2017年は藤沢生誕90年、没後20年となる節目の年であることから、スカパー！と共同で、新ドラマシリーズ第二弾として全3作品を製作する。この3作は藤沢の“市井もの”の原点とされる名短編集『橋ものがたり』から原作を選んだが、今回はその第1作目である『小さな橋で』について審議する。

【審議ポイント】

- オリジナル時代劇で初めてのファミリードラマですが、こうした時代劇では珍しい家族の物語をどのようにご覧になりましたでしょうか？
- “藤沢周平新ドラマシリーズ第二弾”全3作の1本目として、本作はシリーズ全体への期待感を高めていると言えますでしょうか？

## 6. 議題(1)審議内容

- ・シリーズの第1作目に相応しい豪華なドラマだった。子役も上手い。藤沢作品は行間を読み取る楽しさがあるが、ドラマでは全て映像化しているように感じられた。ただ、今の視聴者にはこのぐらいたくさん説明をする必要があるのかもしれないとも思った。
- ・未映像化作品に取り組んだ挑戦を評価したい。渋い意欲作になったと思う。主演の松雪泰子は、薄幸だが凜とした女性像を上手く演じている。少年のナレーションやコメディ要素が『北の国から』の記憶へとどうしても結びついてしまった。
- ・藤沢の小説は以前から好きなので期待して見たが、すんなりと作品に入れたので嬉しかった。一緒に見ていた家族も私も全体的には楽しめたし、吸引力のあるドラマだったと思う。面白かった。
- ・時代劇専門チャンネルのオリジナル時代劇は池波正太郎色が強く、製作陣がそれと全く違うものを作ろうと挑戦しているのは感じられる。ファミリードラマとは、家族を描くことなのか、家族で楽しめる作品のことなのか、と考えてしまった。
- ・今までオリジナル作品は侍が主人公のドラマが多かったが、市井もの、特に子供を出したことで、まさにファミリードラマになった。『橋ものがたり』は藤沢作品の中でも出色の短編集で、『小さな橋で』は中でも最も良い話。お母さんを支える少年の健気さにはホロリとさせられた。残りのドラマ化にも期待したい。
- ・時代劇の家族ものには貧しくても肩を寄せ合って仲良く暮らす人々というイメージがあるが、本作は全く違っていて驚いた。今にも通じる壊れかけた家族の物語で興味深い。少年のモノローグは一部聞き取りにくい部分があったが、インパクトがあった。
- ・時代劇専門チャンネルはいつも良いロケーション撮影をしているが、今回も葦原を使ったシーケンスなど、映像が大変凝っていた。また、冒頭や夜のシーンは特に青の色調が美しく、エンドロールでカラリストを使っていたことを確認して納得した。
- ・現代の若者に受け容れられるかを考えたが、違和感なく見られるだろうと確信した。さだまさしや浅川マキの歌を使うなど、特徴的な音楽に関しては賛否両論あるようだが、監督が確信犯的にやっているのはわかるので、これもありだと思う。

各委員からの発言に対して、当社からの説明・回答は以下の通りであった。

- ・藤沢の市井ものは、江戸時代ではなく昭和、特に戦前の長屋暮らしの人々をイメージしているように感じられ、現代に繋がるその思いに準じて撮った。少年のモノローグは、聞きづらくなるのは承知で息づかいや感情の波を大切にしたい。行間を説明し過ぎという指摘があり、文字通りにすると逆に原作の空気感が出ないと思い、こうした表現にした。音楽は意図的に変化球を使うと決めていた。
- ・『橋ものがたり』の残り7編のドラマ化については、第1弾の3作の反響を見てから考えたい。橋をセットで作らないと物語にはまらない。実在する橋を使うと、人や現代の風景をCGで消す作業に予算の多くが費やされてしまうのが悩みだ。

## 7. 議題(2) 報告事項

【日本映画専門チャンネル 企画特集「今も、映画作家たちは。」について報告】

1月から3ヶ月連続で30代の新進気鋭の映画監督、濱口竜介、深田晃司、三宅唱を特集放送したところ、大きな反響があり、また多数の加入もあった。そこで、9月からはベテラン監督6人に焦点を当てる第2弾を開始した。9月は、4時間半の長尺作品となった瀬々敬久の『ヘブンズストーリー』(2010)。続いて10月から石井岳龍、佐々木昭一郎、大林宣彦、山本政志、万田邦敏と毎月放送していく。日曜夜の人気番組「日曜邦画劇場」の後に続けることで、視聴者がミニシアター系映画に触れるチャンスを増やしていきたい。

8. 連絡事項：次回番組審議委員会は、平成29年11月21日(火)16時より開催。